

氏 名	やまもと しげき 山 本 茂 樹
学位(専攻分野)	博士 (人間・環境学)
学位記番号	人 博 第 132 号
学位授与の日付	平成 13 年 3 月 23 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当
研究科・専攻	人間・環境学研究科文化・地域環境学専攻
学位論文題目	近衛篤磨 ——その明治国家観とアジア観——

論文調査委員 (主査) 教授 宮本盛太郎 教授 高橋三郎 教授 中西輝政 助教授 元木泰雄

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、昭和期の首相・近衛文麿の父である近衛篤磨（1863-1904年）の本格的な思想史的研究である。従来の研究は、篤磨を顕彰する立場からの伝記的記述か、限定された史料からするアジア観の問題性の指摘に止まるものが多かったが、本論文の特質は徹底した史料探求の上に篤磨の思想の全体像に迫ろうとするところにある。以下論文の内容を要約する。

近衛篤磨は、五摂家筆頭当主であり、オーストリア、ドイツ留学後、貴族院議長、帝国教育会会長、学習院院長、北海道協会会長、東亜同文会会長、国民同盟会のリーダーとなり、対内的には責任内閣論、学習院改革、北海道の開拓事業に携わり、対外的にはロシアの南下に対して中国の保全を主唱した。

第1・2章において、オーストリア、ドイツ留学前と留学期における思想形成過程が分析されている。

まず第1章において、留学前の近衛の家庭教師たちについて徹底した調査がなされ、彼の教養の源泉とアジア主義的心情を形成した恩師たちの姿がヴィヴィッドに描かれている。ついで第2章において、海外留学の途次、フランスに占領された澎湖島の現状を目撃し、パワー・ポリティックスの世界を身をもって知るとともに、英文雑誌に発表された中国人・曾紀沢の東洋連合論を訳したこと、在独中友人たちが国民の精神的基軸としてキリスト教を高く評価したのに対し、近衛は仏教の改革を提唱したこと、さらにはドイツでの見聞から日本美術の復興を説き、伝統文化遺産の保存を強く主張したことが指摘されている。この時期の近衛の主張は、直訳的欧化主義に対抗した政教社系ナショナリズムに近いとされる。

第3章では、まずドイツでものさした論文の翻訳「国務大臣責任論」によって、近衛の法理論が検討される。近衛は、法理論的には天皇主権説を取りながら、実質的には天皇機関説・責任内閣論の機能を有する議論を展開する。主権とは「統御権」である。これは「儀式上国家を一身に引受けて外面に表示するの権」である。これに対し、国権は「施政権」であり、「分割制限せられうるもの」である。たとえば、法律や予算の議決には議会の協賛を必要とし、国務に関わる詔勅には国務大臣の副署を必要とする。国務大臣の責任は天皇の行為の合法性の「保険」である。この「保険」は人民に対するものであるから、国務大臣は人民を代表する議会に対しても直接責任を負う。この議論は、機能的には吉野作造の民本主義に連なるものがある。

学習院改革については、近衛は華族のモラルの低下を指摘して華族に品位を養うよう力説し、学習院に大学科を設置して卒業生に外交官となることを勧め、「精神的教育」を重視した。

第4・5章では、近衛のアジア主義の検討がなされている。近衛が本格的にアジア問題を論じ始めたのは1898年頃であり、最初は同人種同盟論を唱えていたが、やがて内外の批判を受けて、西洋化に東洋文化を加えた完全な文化の発展を近代化と捉える理論を展開し、東亜同文会（研究・啓蒙・交流団隊）のリーダーとなった。その後、義和団事件後の満州の状況に鑑み、国民同盟会を組織し、広報活動を展開、日英同盟路線に賛意を表する近衛の軌跡が詳細に辿られている。

第6章では、近衛の北海道論が検討されている。近衛が北海道に注目したのは、北海道を「北門の鎖鑰」として開拓に尽力した岡山監輔の影響があると考えられることが指摘され、北海道に関する近衛の言動が紹介されるとともに、彼の北海道

論と中国論の間には密接な論理的連関があることが鋭く剔抉されている。第7章では近衛の中国論の評価が従来ややもすると外在的になされる傾があったが、評価は近衛の置かれた歴史状況のなかでもっと彼の論理に内在してなされるべきことが提唱されている。

第7・8・9章は、近衛の教育論、宗教論、アジア論についての各論とも言うべき章であって、近衛と京大関係者や附属図書館との関係、近衛と国柱会関係者との関係、若き日の北輝次郎（後、一輝と称す）のアジア観の形成に及ぼした国民同盟会の影響についての微に入り細を穿った詳細な研究成果が示されている。

終章は、近衛父子の比較を、明治と昭和という時代の国際状況の違いを念頭においてなしたものである。最後に付された年表は詳細を極め、申請者の近衛研究の蓄積を象徴している。

論文審査の結果の要旨

近衛篤麿の研究の焦点は、戦前には顕彰の意を含んだ伝記的研究に、戦後にはアジア観の研究に合わされたが、近衛の明治国家観とアジア観を徹底した史料探求の上で構造的に捉える本格的な研究は見られなかったといつてよい。本論文は、この課題に答えた意欲的な力作である。

本論文の第1の特質は、史料の博搜にあり、従来知られていなかった事実が多数発掘されている。たとえば、第1章では、名前位しか知られていない近衛の家庭教師たちの経歴、彼らの思想的特質と近衛への影響が調べられている。さらに、家庭教師に止まらず、すべての章の様々な局面で姿を現す人々の生年月日、没年月日、経歴まで記載されている。

また、論文全体にわたって『螢雪余聞』（近衛の手記）、日記、論文、演説草稿、貴族院議事速記録など現在入手しうる最大限の史料が鑿められている。

第2の特質は、近衛の思想を歴史的文脈の中で確定したことである。アジア主義の形成過程を分析した章では、近衛のナショナリズムと明治20年代の政教社系ナショナリズムとの類似性が指摘され、国法学レヴェルの主権論や政治学レヴェルの責任内閣論には後の吉野作造の民本主義の主張に連なるものがあることが述べられている。とくに、後者の指摘は貴重であって、国法学者・政治学者の法・政治理論の研究に専ら専念する嫌いのある斯学の研究者にとって頂門の一針となるであろう。

第3の特質は、オーストリア、ドイツ留学を体験している近衛の思想の核に伝統的なものが存在していることを剔抉していることである。近衛の天皇観には皇室と特殊な関係を有する近衛家の立場と儒教の教説が見られ、近衛がナショナリティの構築のためには単なる西洋化のみではならず、西洋化の上に東洋文化を加味する必要性を説き、宗教（とくに浄土真宗）と歴史教育のもつ意味の重要性を強調したことが述べられている。

第4の特質は、近衛の北海道論とアジア主義との論理的連関性を明らかにしたことである。近衛と北海道との関係については従来ほとんど注目されてこなかった。申請者は近衛と北海道との関わりを徹底的に調査するとともに、北海道論と中国保全論との論理的連関性を見るというユニークな視点を提示している。近衛は、何度も北海道開拓についての建議案を提出し、北海道協会会長となった。対外的脅威の感じられなかった時点では経済的發展に関する配慮が強く出るが、三国干渉やシベリア鉄道問題に伴い対外的危機が認識されてくると、自衛のための国防的配慮が前面に出てくる。

中国に対する見方もこれと平行であり、対外的脅威が深刻でない場合には、日中両国の民間における相互理解と貿易の強化が説かれるが、対外的脅威が強く感じられる場合には、主として国防上の理由から、中国分割を目論む勢力の排除が強調されるのである。

第5の特質は、教育・宗教・アジア主義という近衛の思想の核となる部分に引かれた補助線ともいうべき部分であって、京大、国柱会関係者と近衛の関係と、北輝次郎（後、一輝と称す）の思想形成のアジア主義的側面に及ぼした国民同盟会の思想的影響について、初めて本格的な調査・研究を行っていることである。京大との関係について述べると、創設当時の京大法科大学教授の代表的な大学論は高根義人の『大学制度管見』であるが、これは1902年11月に近衛に寄贈された。近衛は初代総長・木下広次が文部省にいたころに既に会ったことがあり、創設当時に京大を訪ね、またいろいろと便宜をはかっている。近衛家の蔵書類を京大に寄託しているほか、京大生や三高生に奨学金を出している。1901年に京大附属図書館が実質的に中心となって創刊した関西文庫協会の機関誌『東壁』の題字も近衛の手になるものである。近衛にとって学習院と京大

は特別な意味をもつ学校であった。

以上のような特質を有する本論文は日中研究をめざして創設された文化・地域環境学専攻日本文化環境論講座にふさわしい内容を備えたものと言える。

よって本論文は博士（人間・環境学）の学位論文として価値あるものと認める。また、平成13年2月15日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。